

令和3年度 学力向上プラン

学校名 中央区立阪本小学校

学校の教育目標

・思いやりのある子 ・よく考える子 ・たくましい子

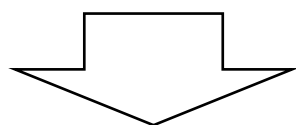
教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

・基礎・基本の定着を実感させるとともに、自ら学んだという達成感を味わわせ、自信をつけさせる。

令和2年度「学習力サポートテスト」や令和2年度学力向上プランの検証結果等の分析や、日常の学習の様子等から見られる課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国 語	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いの内容を聞き取ることにやや課題がある。（学習力サポートテストの結果・授業中の児童の様子） 「話すこと」「聞くこと」の領域にやや課題がある。（学習力サポートテストの結果） 	<ul style="list-style-type: none"> 語彙力が少なく、語彙に対する理解が不十分である。 相手や目的を考えて話すことに意識が向いていない。
算 数	<ul style="list-style-type: none"> 図形に関する領域の理解度にやや課題がある。（学習力サポートテストの結果） コンパスや三角定規などを使用する作図に課題がある。（授業中の児童の様子、評価テスト） 	<ul style="list-style-type: none"> 用具などの操作が苦手である。
社 会	<ul style="list-style-type: none"> 知識理解は高いが、自分の生活につなげて考えることに課題がある。（評価テスト・授業中の児童の様子） 生活環境に関わる内容理解が低い。（学習力サポートテストの結果、授業中の児童の様子） 	<ul style="list-style-type: none"> 知識として理解したことを、生活とつなげて考えられていない。
理 科	<ul style="list-style-type: none"> 植物の育ち方や動物など生き物の様子に関する知識理解に課題がある。（学習力サポートテストの結果） 植物の育ち方や動物など生き物の様子に関する知識理解が低い。（学習力サポートテストの結果） 天体や自然現象に関する内容理解が低い。（学力サポートテストの結果） 	<ul style="list-style-type: none"> 生き物を育てる環境が学校及び周辺に少なく、生き物に触れる機会が少ない。 冷暖房完備のビルで1年中生活しているため、自然環境の変化を実感しづらい。
英 語	<ul style="list-style-type: none"> アルファベットや単語など「書くこと」に課題がある。（授業中の児童の様子、評価テスト） 日常生活に関する対話から目的や場面、状況を推測することに課題がある。（学力サポートテストの結果） 	<ul style="list-style-type: none"> 話したり聞いたりする学習が中心となり、アルファベットや単語などを書く時間が少ない。
体 育	<ul style="list-style-type: none"> ソフトボール投げがやや苦手である。（体力調査の結果） 20mシャトルランなど、持久力に課題がある。（体力調査の結果、授業中の児童の様子） 低学年の握力に課題がある。（体力調査結果） 	<ul style="list-style-type: none"> ボールなどを投げる経験が不足している。 一定の負荷の中で運動を継続する経験が不十分である。

学力向上に向けた視点	年度末までの目標及び指標
① 学力基盤	<ul style="list-style-type: none"> ・自然環境の制限が多い中、7月完成予定の坂本町公園や屋上校庭の学校園等を活用した学習を進める。 ・児童の授業規律、及び基礎学力の定着を図り、保護者アンケート「学校は児童に基礎学力が身に付くよう教えている」の肯定的回答90%以上、児童アンケート「授業の内容はよくわかりますか」の肯定的回答95%以上を達成する。
②授業改善	<ul style="list-style-type: none"> ・生活科や理科では、生き物の観察や実験を充実させ、学習したことと日常生活とをつなげる授業を組み立てる。 ・筋道を立てて自分の考えをもつ学習スタイルを確立し、保護者アンケート「自分から課題をもち学習しているか」の肯定的回答80%以上を達成する。
③教員の指導力	<ul style="list-style-type: none"> ・随時、年間を通して、お互いの指導を見合うなどのOJTを実施し、個に応じた指導実践に向け、研修を充実させる。 ・OJTの取組をパソコンの共有フォルダに保存し、教職員全員が常時閲覧できるようにし、組織的な指導力の向上を目指す。 ・教職員による学校評価「個に応じた個別指導の実践」のA評価（十分達成してる）の回答90%以上を達成する。
④家庭との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭と学習指導や生活習慣に関する指導の共有を図るために、年3回の児童との面談、年2回の保護者との個人面談を実施する。 ・1人1台タブレット端末を家庭との連携で活用する。 ・保護者アンケート「保護者に出す文章や連絡等は、わかりやすく内容も適切である」の肯定的回答95%以上を達成する。
⑤体力向上	<ul style="list-style-type: none"> ・運動量の確保とマイスクールスポーツ、オリンピック・パラリンピック教育を推進する。 ・体力調査の結果を前年度よりあげるよう、日常および体力向上月間で取り組む。 ・児童アンケート「自分の体力づくりに取り組んでいますか」の肯定的回答85%以上を達成する。



【目標達成のための具体的な取組内容】

① 学力基盤	
取組Ⅰ	学習力サポートテスト、全国学力調査、レディネステスト等の結果から、習熟度別指導を推進する。
取組Ⅱ	学習規律確立の一環として、あいさつキャンペーンを実施し、特に授業の始まりや終わりのあいさつに対する意識を高める。
取組Ⅲ	7月完成予定の坂本町公園などを活用し、植物や生き物の観察を継続的に行う。

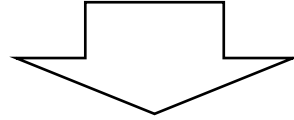
② 授業改善	
取組Ⅰ	校内研究を通じて、「個」→「ペア」→「全体」→「個」の学習のサイクルを継続的に行い、筋道を考えて自分の考えをもつ授業スタイルを確立する。
取組Ⅱ	観察や実験の方法を児童自らが考える授業スタイルを工夫する。
取組Ⅲ	単元のまとめの学習では、学習内容が日常生活とどのようにつながるかを考えさせる発問をする。

③ 教員の指導力	
取組Ⅰ	OJTとして、それぞれの教員が授業を公開し合い、問題解決型の学習を進めるために助言および指導を行う。
取組Ⅱ	プログラミング教育の校内の研究授業を年5回実施し、主体的・対話的で深い学びを中心とした学習を進める。
取組Ⅲ	区内外の研究会・研修会などに積極的に出席し、個に応じた指導の実践意識を高める。

④ 家庭との連携	
取組Ⅰ	年3回の児童との面談では、事前にアンケートを実施する。また、年2回の保護者との個人面談を通して、児童にも保護者にも相談しやすい体制を作る。
取組Ⅱ	年5回の学校公開では、「授業のねらい」を示し、保護者に対し学習内容を伝えて授業参観を実施する。
取組Ⅲ	1人1台貸与されるタブレット端末の活用、学校だより、学校評価アンケート等の送信、家庭学習キャンペーンの年3回実施を通して、家庭での学習の充実を図る。

⑤ 体力向上	
取組Ⅰ	体育朝会や授業の中で、マイスクールスポーツの「なわとび」を中心に、運動の質を高めたり、運動量を確保できる場の設定を工夫したりするとともに、鉄棒やうんていなどを活用し、「つかむ」感覚を大切に授業計画を立てる。

取組Ⅱ	「できる喜び」を多くの児童に実感させるために、体育指導補助員を活用して、個別指導を進める。
取組Ⅲ	外部講師も活用し、オリンピック・パラリンピック教育を充実させ、様々な運動に興味をもてる児童を育成する。



【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点	取組の成果	取組の課題及び解決策
①学力基盤	<ul style="list-style-type: none"> 交通安全講話、法教育、水道・下水道キャラバンなど、様々な教科等で外部講師を招き、専門的な話を聞くことで、児童が意欲的に学習に取り組めた。 算数科では、習熟度別学習を展開し、個に応じた少人数指導を進めた。 理科支援員、学習指導補助員等の人材を活用し、個に応じた指導が進められた。 気持ちのよい挨拶が定着してきた。 坂本町公園で植物や生き物の観察を行うことで、興味関心が高まった。 学校評価の保護者アンケートでは、「学校は児童に基礎学力が付くように教えている」の項目では、96%以上が肯定的な回答であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 外部講師等の活用を積極的に取り入れたが、コロナ禍においてオンラインになることもあった。やはり、直接の授業の方が児童の興味関心が高まるが、感染拡大防止を考え、今後もオンラインの併用は必須である。オンラインでの授業の仕方を外部講師と検討し、より良い内容にしていく。 4年生以上の算数において、立体図形の面・辺がうまく捉えられていない。模型を取り入れ、位置関係の理解を深めていく。 学力の中位層に対する学力向上を図ることが課題である。算数少人数学習等を活用して、よりきめ細やかな個に応じた指導を進める。
②授業改善	<ul style="list-style-type: none"> 様々な教科、場面で教師、児童ともにタブレットPCを日常的に活用し、多様な活用方法による授業スタイルが実践できた。 全教職員が研究の成果を生かしたプログラミング教育の理解と実践を通して、論理的な思考力を育てる授業を意識的に行うことができた。 「個」→「ペア」→「全体」→「個」の学習サイクルが定着した。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍において、ペア、小グループでの対話を中心とした活動は積極的にできなかった。 対話を中心とした活動ができない部分を、タブレット端末のアプリを活用し、お互いの意見を共有できるようにしてきた。今後もタブレット端末の授業支援を効果的に活用していく。 今後も、ICT機器を最大限活用しながら授業の質的改善を追求し、深い学びを実現していく。

<p>③教員の指導力</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初任者の授業を参観し、助言・指導を行うことで各教員の授業形態の振り返り、改善となった。 ・タブレット端末の活用技術が向上し、教員間での教え合いも増え、授業での効果的な活用が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科、単元において、児童の実態に合わせた指導計画を立て、見直しをもって授業に臨む。 ・R-PDCA サイクルによる授業改善ができるように、パソコン端末を活用した取組みを全体で共有し実践していく。 ・管理職は主幹を育て、主幹は主任を育て、主任は教諭を育てることに責任をもち、OJT 研修を日常的に推進する。
<p>④ 家庭との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年3回の児童との面談、年2回の保護者との個人面談を行い、家庭と、学習指導及び生活習慣に関する指導の共有が図れた。 ・コロナ禍において、Meet を活用した保護者会や学校公開を実践できた。Classroom を活用した、学校日より、学年日より等の配信も行い、保護者が学校の情報を得やすい環境を整えた。 ・タブレット端末を活用した学校評価を実施することで、回答率が上がり、自由意見欄に肯定的な内容が増えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍で、オンラインによる保護者会や授業公開の実施、わんぱく相撲、羽根つきなどの行事の中止に伴い、保護者と直接会う機会が少なくなった。学校評価でも「わからない」という回答もあったので、学校や児童の実態を伝える機会や手段を考えていかなければならない。 ・今後も、タブレット端末や学校ホームページを活用して、学校や児童活動の状況をより積極的かつタイムリーに伝えていく。
<p>⑤体力向上</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・屋根付き屋上校庭は、年間を通じて天候に左右されずに、体育や休み時間の運動量が確保でき、体力向上につながった。 ・体育朝会などを活用し、なわとびの面白さを伝え、児童が楽しみながら運動できた。 ・コロナ禍でもオリンピックによる授業、講話のオンライン配信を行い、児童の運動に対する意欲が高まった。 ・なわとびの学習カードを効果的に活用することで、体力向上を図ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツテスト結果を分析すると、中央区内でトップレベルの水準であることが分かった。引き続き、課題である。握力・反復横とび・持久力の克服・改善を図る。 ・児童アンケート「自分の体力づくりに取り組んでいますか」の肯定的回答が80%と、昨年度よりは向上したものの、アンケート上の85%という目標は達成できなかった。 ・マイスクールスポーツの「なわとび」を中心に、長期休業中の継続的な運動を定着させる取組を実践する。